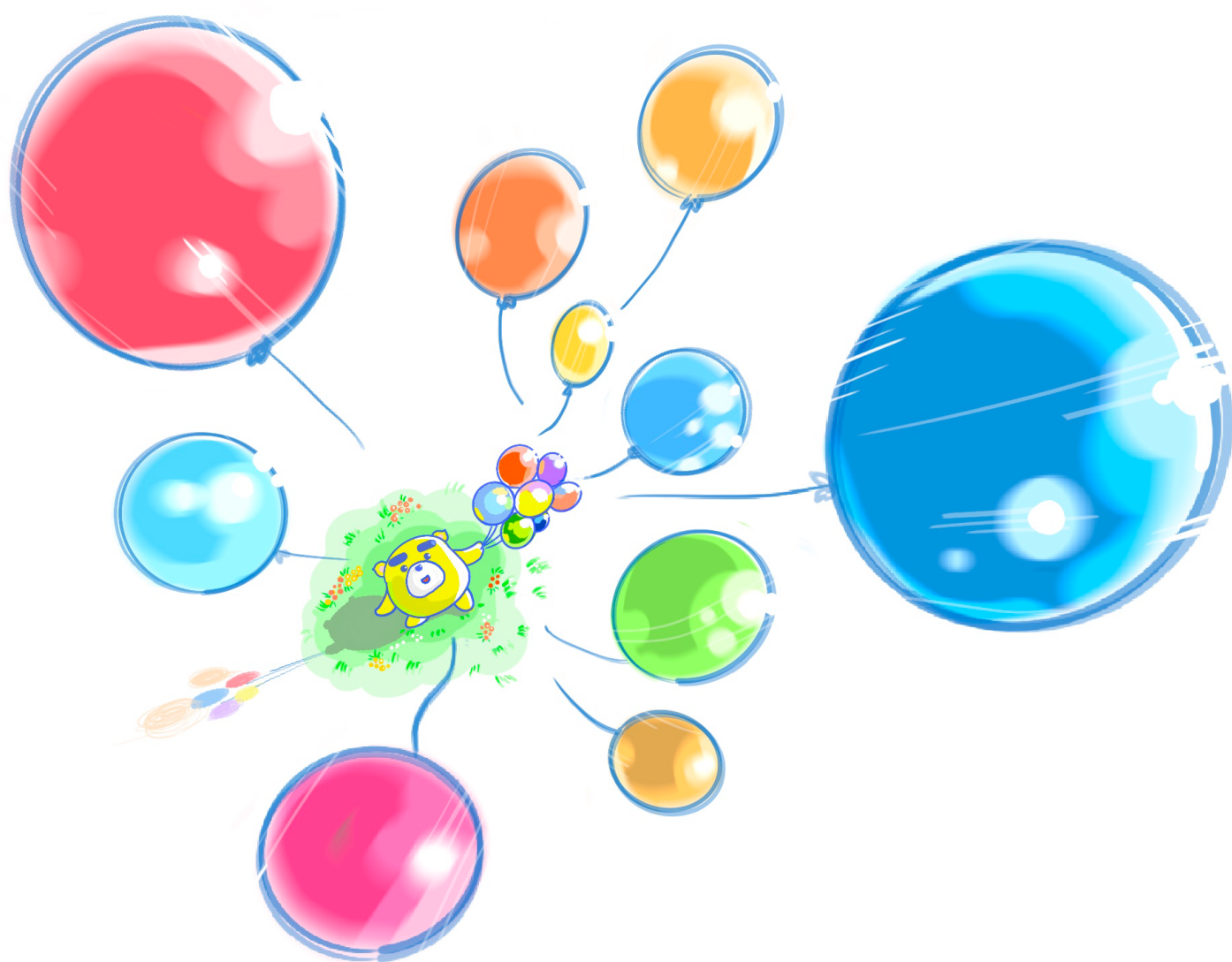


# 東海テレビこの1年の取り組み

2021



東海テレビ放送株式会社

## ごあいさつ「あの日を礎に」

“あの日”から10年が経ちました。

2011年8月4日、東海テレビは「ピーかん問題」を起こし、放送開始以来50年余りかけて積み上げた信頼を一瞬にして失うこととなりました。

「テレビで失った信頼はテレビで取り戻す」という決意のもと、再発防止に向けさまざまな取り組みを続けてまいりました。

10年という節目に当たり、今一度、放送に対する責任と、公共性や公益性を心に刻み、同じ過ちを二度と繰り返すことがないように、関係者一同、誓いを新たにしています。

さて、新型コロナウイルスの国内感染が初めて確認されてから1年半余りになります。今や外出時はマスク姿が当たり前となり、アルコール消毒や検温、ソーシャルディスタンスが日々の常識になりました。在宅勤務やリモート会議など、新しい日常ですが、喜怒哀楽の機微を直に共有できないところに、どこか息苦しさを感じます。ワクチン接種が進んではいるものの、不安感を拭い去るまでには至っていません。こうした状況でメディアとして果たすべき役割は、やはり皆さまの暮らしに役立つ正確な情報を伝え、勇気づけることだと思えます。

ここで私たちが改めて強く意識するのが「地域貢献」です。東海テレビでは2021年度から向こう3年間の活動方針を策定しました。基本理念は「地域」をより強く意識したものとし、その中で「SDGs＝持続可能な開発目標」を企業活動の指針のひとつに位置づけました。東海テレビは今年1月、国連のSDGメディア・コンパクトに加盟し、番組の放送や社内外での活動を通じ、この理念を形にする実践を積極的に行ってまいります。またコロナ禍でも皆さまが少しでも安心して日々の暮らしが送れるよう、そして環境や人にやさしい地球規模の課題解決のため、この地域から考えてまいります。

昨今、若年層を中心に、テレビ離れの歯止めがかからず、放送をめぐる環境はますます厳しくなっています。過酷な生存競争に勝ち残るためには変革が不可欠です。私たちは放送とイベントに加え、配信事業に注力することも柱の一つに据えました。映像メディアというテレビの特性を最大限に生かし、すでに運用が始まっている映像配信サービス「Locipo」（ロキポ）を軸に、当社の良質な映像コンテンツをご覧いただけるよう進めてまいります。

本報告書は、毎年8月4日から1年間の活動を中心に、2012年から発行してまいりました。今年は問題から10年、節目の年ということで、現在の各局責任者が、所属部署の中核として対応にあたった当時に思いを致しながら、今後に向けた抱負などについて寄稿しています。私たちの決意の一端としてぜひご覧ください。

私たちの未来に向けた変革の礎は“あの日”にあります。「地域に貢献し最も信頼されるテレビ局」の実現を目指し、私たちは、時代にしなやかに対応しながら、高い倫理観を持って、この地域の文化発展の一助となるべく精進してまいります。

今後とも皆さまの応援を引き続きよろしく願いいたします。



東海テレビ放送株式会社  
代表取締役社長

小島浩資

## 《基本理念》

1. 放送の持つ公共性、公益性を強く自覚し、社会的使命感と高い倫理観を持って職務を遂行する。
1. ジャーナリズムを堅持することで表現の自由を守り、正確・公正で迅速な報道を通じて視聴者の知る権利にこたえる。
1. 災害時のライフラインとしての使命を果たし、地域の“命と生活を守る”情報発信に全力を挙げる。
1. 「ふるさとのテレビ」として地域密着を最優先し、良質な番組制作やイベント・催事を通じて、市民生活に役立つ情報と健全な娯楽を提供する。
1. 放送局としての自主・自立を守るため経営の安定化を図る。
1. SDGs(持続可能な開発目標)宣言をふまえ、これを企業活動の指針のひとつとする。

## 【ビジョン】

地域に貢献し 最も信頼されるテレビ局

### 目次

ごあいさつ「あの日を礎に」	p1	「びーかん」に思う③	p16
基本理念・ビジョン・目次	p2	5. 放送を通じた地域貢献	p17
1. 「新型コロナ」と向き合ったこの1年	p3	「びーかん」に思う④	p20
「びーかん」に思う①	p5	6. その他の地域貢献	p21
2. 岩手県をはじめとした被災地支援	p6	7. 視聴者など社外の意見を参考に	p23
「びーかん」に思う②	p8	第三者意見Ⅱ	p25
3. 放送倫理意識向上のために	p9	この1年の取り組み	p26
第三者意見Ⅰ	p11	おわりに	p27
4. 「持続可能な開発目標」	p12		
SDGsに関する取り組み			

新型コロナ感染症の影響は今も続いています。東海テレビではコロナの情報をお伝えする一方で、番組ロケの中止や番組出演者のリモート出演、さらにはイベントの中止や延期など、感染防止に向けたさまざまな対応をしてきました。ここでは新型コロナに関する取り組みについてご報告します。



## ニュースONE 新型コロナ報道

報道部 山本 茂樹



## 本当のウイルスは何か

『この距離を忘れない。』制作後記

報道部 桑山 知之



「ニュースOne」では、4月以降ワクチン接種に関する地域情報を毎日伝えています。ワクチンはいつ発送されるか？に始まり、接種券の

発送はいつか？予約はいつからどうやって？と続き、最近では接種率にも注目しています。こだわっているのは市町村単位で情報を発信すること。「わが街のワクチン情報」が視聴者にとって最大の関心事、新聞の地方版レベルのきめ細かさを目指しています。そのためにデスク1人、記者2人、アルバイト1人の体制で、東海3県の125市町村に電話をかけ毎日情報をアップデートしています。

**岐阜 一般接種者ワクチン供給スケジュール**

月	火	水	木	金	土	日
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

コールセンターさながらの光景です。

新型コロナの感染拡大から1年半、報道現場の試行錯誤は今も続いています。先日ある識者から「コロナは災害、コロナ報道は災害報道であるべき」との指摘を受けました。「マスクは外出する人々や休業要請に応じない娯楽施設への批判を流し続けたが、被災者（国民）を不安にさせるだけ」とも語っていました。自戒を込めて…となりますが、災害が起きた時、やり場のない怒りのはげ口となるような報道は、感情の暴走と社会の分断を招きます。そして今も、その類のネタはいくらでもあふれています。

我々に求められているのは、災害克服へ真に役立つ情報を発信する努力です。きょうも続く地道な電話ローラー作戦もそのひとつだと思っています。

ドキュメンタリーCMのプロデューサーを拝命して3年目。「テレビ報道」「発達障害」の次は何をテーマに扱おうかと思案していた2020年頭、世界中を未知のウイルスが襲った。3月中旬、上司から連絡が入った。「社会風刺もあれば、人の優しさ、強さも表現できるかも」。スタッフ全員、手探りで取材がスタートした。

例年、ロケにはコピーライターと監督が同行するが、感染拡大防止のため取材や編集に至るまで、今年はほぼすべての工程がリモート。実際に現場を見て、人と会って、スタッフと相談をしながら……。これまでの経験は一切通用しなかった。制作過程では、何度も歯がゆい場面に遭遇した。

ウイルスが社会に及ぼした影響はあまりに大きい。私たちは「距離」に着目した。確かに見えてきたのは、差別や社会との断絶、政治との乖離だった。この作品は、時代のタトゥーになる。ノートにペンを走らせ、キーコピーを書いた。「この距離を忘れない。」

放送から1年以上が経った今も、このウイルスは現在進行中だ。でも、忘れかけている。リモート取材中、小学5年生の女の子が言った。「大事なのは心の距離なんじゃないの?」。ウイルスによってあぶり出された距離こそが、私たちが終息させるべき本当のウイルスなのかもしれない。





コロナ禍でも地域とともに

【ぐっさん】  
**ぐっさん家**  
~The Gussan House~

制作部 稲吉 豊



今年で19年目に突入した「ぐっさん家」。

ぐっさんこと山口智充さんが、東海地方のいろいろな街に出かけて、人と触れあい、名物に触れながら、地元の魅力を発信しています。

信じています。

コロナ感染の拡大と緊急事態宣言の発出により、一時期は、街に出るロケを自粛しました。

その間、東京のスタジオと、名古屋にいるディレクターを映像でつないで、地元の名産を紹介するリモート撮影を行ったり、過去の名シーンを集めた傑作選を放送したりと、番組テイストを守りながら放送を続けました。

今は、感染予防に最大の注意を払いながら、東海地方に繰り出すロケを再開しています。

そこで感じるのは、ものすごく多くの方が「ぐっさん」を待っていてくれる事。

接する方々が笑顔になっていく瞬間を見るたびに、ロケに来てよかったと実感します。

街に出るからこそ届けられるものがあり、伝えられる思いがあります！

「ぐっさん家」はコロナ禍だからこそ、見て下さる方の心に寄り添いつつ、たくさんの笑顔と元気を届けたいと思います！



コロナ感染対策は万全に  
各種事業イベント

事業部 古田 直樹

事業部は「地域への貢献」「視聴者への娯楽の提供」を掲げ、イベントを実施する部署ですが、新型コロナウイルスの影響で、2020年度に予定していたイベントの約6割にあたる50件超が中止となりました。

こうした中でも、コロナ対策に取り組みながら、女子ゴルフツアーの「デサントレディース東海クラシック」を無事開催しました。無観客での開催となりましたが、当社は全国ネット放送を通じてゴルフファンの皆さまに熱戦をお伝えすることができました。



ライデン国立古代博物館所蔵  
古代エジプト展

また、愛知県美術館では大型企画「ライデン国立古代博物館所蔵 古代エジプト展」を開催、入場制限を設けながらも10万人以上にお越しいただきました。

そして毎年好評をいただいている、クラシック音楽コンサートのシリーズ企画や「大名古屋らくご祭」は観客席数を制限して開催し、コロナ禍のなかでも地域の皆さまに喜んでいただける空間の提供に努めました。

2021年は3月から7月にかけて、16年ぶりに地上に降ろした名古屋城の金のシャチホコを市の中心部で有料展示しました。災いから城を守るとされるシャチホコの展示には、コロナ禍のなか疫病退散や街を元気にしたいとの思いも込めていて、来場者に喜んでいただきました。



名古屋城金シャチ特別展覧

## 『人の傷みには敏感に』 **コンプライアンス推進局 梅村 育宏**

昔、テレビが家庭の真ん中にあった時代、「テレビは送り手で視聴者は受け手」という一方通行の関係が強かったように思います。

その後インターネットの発達で、テレビと視聴者の間で双方向のやり取りができるようになりました。さらにSNSが浸透すると、あらゆる人が自由につながるようになりました。そして、視聴者のコメントが大量にあふれるようになった今、テレビの方が右往左往するようになり、送り手と受け手の関係が逆転したとさえ感じます。

しかし、ここで意識しなければいけないと思うのは「視聴者なくしてテレビは成り立たない」ということです。ともすれば、長年かけて築いた信頼を一瞬にして失ってしまうことを、私たちは身をもって経験しました。

一方で伝える側の矜持を持ちながら、もう一方では視聴者の感覚を忘れず、人の傷みにいつも敏感であるべき…。そんなことを思いながら、今も「放送倫理」を問い続けています。

## 『コミュニケーションの重要性』 **経営企画局 伊藤 正之**

営業時代にスポンサーの競合問題で大トラブルが発生。きっかけはごく単純な確認ミス。その後の対応も後手に回り、のちに「あの時あーしておけば良かった」と反省しても後の祭り。今でも思い出す苦い思い出です。

状況は違えど、昨今のスポーツ界や芸能界の不祥事は初動対応を誤った結果、引退に追い込まれたり、復帰の目途が立たない例が続いています。当方に非があれば、まずは速やかに素直に報告・謝罪する。報告の遅れ、言い訳がましい責任逃れと取られるような謝罪は心証を悪くしトラブル解決が上手く進みません。誤魔化しや曖昧な対応は、どこかで整合性が取れず辻褄が合わなくなります。組織として動いている以上、トラブル発生時の確かな報告は重要です。部下や後輩が委縮することがないよう、上司や先輩は報告しやすい雰囲気作りを常日頃から心掛けることがとても大切かと思えます。自戒の念を込めて。

## 『全社コミュニケーションの活性化の更なる推進を』 **総務局 石黒 望人**

ぴーかん問題発生直後、視聴者の皆さまの電話対応業務を担うスタッフとして、数多くのお叱りの言葉を直接お聞きし、この問題のとてつもない大きさを何度も痛感した記憶は今でも鮮明だ。こうした中、当時、検証委員会から不祥事の要因の一つとして指摘を受けたのが「スタッフ間のコミュニケーション不足」だった。

あれから10年、日頃から多くの従業員と向き合う総務局に身を置く中、社内のコミュニケーションの大切さを常に意識してきた。その中で、特に昨今の変化の激しいこのデジタル時代には、直接顔を合わせ気軽に会話ができる職場の風土がますます重要で、危機意識の継続の大きな要素の一つだと強く感じている。

今後も引き続き、総務局員とともに「全社コミュニケーションの活性化」を積極的に推進し、東海テレビで働く全ての人が、初心に戻り、タテとヨコのコミュニケーションの大切さを常に意識し、自然に実践していける環境作りに努めていきたいと考えている。

2011年3月11日の東日本大震災から10年、その直後に東海テレビが起こした「ピーかん問題」は岩手県の米農家をはじめ被災者、そして関係の皆さまに多大なご迷惑をおかけすることとなりました。東海テレビでは岩手県をはじめとする被災地支援を目的に、この1年も各種取り組みを行いました。



### 3. 11 東北支援 特別企画 「心と生活を守る“10年分のヒント”」



制作部 時田 一雄



### 東日本大震災から10年



報道部 高山 美月



「震災は他人事だった」  
今回の取材で多くの被災者が口をそろえて言った言葉です。

当時、テレビを通して未曾有の大災害を目の当たりにし、ショックを覚えた私たちも、あれから10年、500km離れた被災地・・・記憶が薄れ、南海トラフ巨大地震も「まさか私が・・・」と他人事のように感じている人も多いと思います。

そこで今年の東北支援は「復興から学ぶ 心と生活を守る“10年分のヒント”」と題して、復興から10年、歳月が経つにつれ薄れゆく「東北」への気持ちを忘れないよう、南海トラフを頭の片隅に置きつつ「自分ごと」に置き換えて感じてもらう企画を考えました。

大震災後、愛知から10年間、支援を続けた団体「NPO法人レスキューストックヤード」を取材、東北の方々の声と共に、蓄積された経験や、南海トラフに備え、いざという時の心構え、また被災後、私たちが心身の健康のために何が必要か、を伝えました…まさに「私たちが被災から心と生活を守るため、10年間ストックした情報」です。

復興は道半ば、取材を通して、東北支援とは「忘れないこと」と被災者は語ります。



自分の身になって考えるからこそ、「3.11」を忘れず、その経験・教訓を活かせるのではないのでしょうか。



“東日本大震災から10年”。この言葉を今年どれほどのメディアで見聞きしたでしょうか。

取材を始めた2月は緊急事態宣言下。現地に行くことは難しく、名古屋から東北支援を続ける居酒屋を取材することになりました。店のメニューは、魚も酒も東北の食材のみ。そのこだわりを語る店長の話を聞くうちに、なぜ10年も支援を続けられるのか、疑問が湧きました。

「最初は支援だったけど今はそのつもりはない。東北の魚は本当に美味しいから仕入れているだけ。10年はただの通過点ですよ」



3月になって宣言が解除となり、急遽東北へ行けることになりました。訪れたのは岩手県・陸前高田市。もう町にがれきはなく、道路も公園も「奇跡の1本松」の広場も、綺麗に整備されています…がその姿はなんとも寂しい。

現地では、津波で家も店も流されたという洋菓子屋で話を聞くことができました。

「町はきれいになって、新しい店も出来た。でも、人が戻ってこない。本当に頑張らなきゃいけないのはこれからです」  
“東日本大震災から10年”。

これは節目ではなく、東北が積み重ねてきた時間とこれからも続く道のりのスタートなのだと感じました。私たちが途切れさせることなく、東北の今の魅力を伝え続けていきたいと強く思います。





世の中の健康と福祉のために  
東海テレビ福祉文化事業団  
植木 圭一

社会福祉法人東海テレビ福祉文化事業団は1979年に設立され、東海地方の障がい者や高齢者、子どもの福祉向上や社会参加支援のためにさまざまな活動を



東海テレビ福祉文化事業団

続けてきました。年間を通じた「愛の鈴 しあわせキャンペーン」や、年の瀬の「愛の鈴歳末助け合い運動」の募金活動などを支援しています。また、東海三県の障がい者福祉に携わっている社会福祉団体に対し、軽自動車「愛の鈴号」を寄贈し、身体のハンディを克服し社会的に自立・活躍している地域在住の方々に「東海テレビひまわり賞」を顕彰しています。

これら福祉事業の他、被災地支援にも力を入れています。2011年の東日本大震災では発災直後から義援金を募り、2020年度は約200万円を東北被災地復興支援のため内閣府に託しました。地元愛知・岐阜・三重県を中心に、地域の皆さまから発災時からこれまでに合計約1億2千8百万円の義援金をお寄せいただいたこととなります。

また、昨年2020年7月豪雨では、義援金を岐阜県の被災地に寄託しました。

これからも世の中の健康と福祉のために、そして被災地支援に力を注いでまいります。



岩手米の社内販売と社員食堂での消費

東海テレビでは岩手県の震災復興支援の一環として、2020年10月から11月に岩手産米「ひとめぼれ」、「銀河のしずく」新米の社内販売を実施し、5kg入り3100円を263袋、計1315kgを販売しました。

(ひとめぼれ99袋 銀河のしずく164袋)

また、2020年4月から2021年3月に、社内食堂で岩手産米「ひとめぼれ」を計3380kg消費しました。



この1年でお伝えした  
主な被災地支援番組・企画

One

- 7月3日 山形・河北町が防災協定を結ぶ愛知・豊山町の園児にコロナで買い控えのサクランボをプレゼント
- 9月2日 岩手物産展きょう開催(名鉄百貨店)
- 12月9日 岩手産高級リンゴ 名古屋で初販売(名古屋三越)
- 2月16日 奇跡の一本松“接ぎ木”松を来月東山動植物園に植樹
- 3月3日 シリーズ企画「私とボウサイ」～災害時のペット避難～
- 3月10日 シリーズ企画「私とボウサイ」～悲劇から10年 蘇った「校歌額」～
- 3月11日 シリーズ企画「私とボウサイ」～東日本大震災からきょう10年～
- 3月31日 “被災地”の女子大生 名古屋で看護師の夢かなえ岩手へ

SWITCH  
スイッチ!

- 9月2日 岩手県の観光と物産展(名鉄百貨店)
- 11月10日 第10回大東北展  
(ジェイアール名古屋タカシマヤ)
- 3月8日 特集「東日本大震災から10年 被災地支援“復興スイーツ”」
- 3月11日 特集「東日本大震災から10年 “心と生活”を守る10年分のヒント」



## 『自問自答』 編成局 倉知 哲也

瓦礫と泥に塗れた教室の床から紙片を拾い上げると、小学生の男の子の名前が書かれた学習ドリルだった。赤ペンで採点され、ほぼ満点の出来栄え。先生からドリルをもらい得意気な少年の顔を想像した次の瞬間、果たしてこの子は無事だったのか…やるせない気持ちになった。

10年前、大地震と原発事故で被災した東北に、新聞の取材デスクとして幾度か赴いた。現実とは思えない被災地の惨状を目の当たりにする日々。そのさなか、飛び込んできた「ぴーかん事件」に耳を疑った。

その後、テレビ局の一員となり、初めて参加した全社集会。重苦しい雰囲気の中、猛省しながらも前を向く仲間たちの真剣な眼差しを鮮明に覚えている。

問題が起きた後に入社した私だが、放送人の端くれとして、あの問題にどう向き合ってゆけばいいのか。先輩が上梓した、テレビマンに奮起を促す「さよならテレビ」(阿武野 勝彦著、平凡社)を読み返しながら自問自答を続けている。

## 『指差し確認の大切さ』 デジタルビジネス局 深川 辰巳

「指差し確認」というのを子どもの頃よくいわれた。粗雑な性格だったので両親から、間違いがないかひとつひとつ指で確認しなさいと躡けられた。それなのに大人になってだんだん怠るようになり、小さなミスが大きな失態につながることも後悔した。「ぴーかん事件」は物凄く、心から打ちのめされた。当時は、自分の持ち分を対処するしかなかった。事件はシンプルだがそこにある闇は根深く社会的影響は多大だった。これを繰り返さないこと、それこそ最大の課題だった。絶対的な対処方法はなくコツコツと確かめるしかない。電車の運転士のように、ひとつひとつ安全確認をする。いろいろな方向を向き、順番に点検していく。両手がふさがっていたら、目で「指差し確認」をする。手が届かなければ想像力でそれをする。10年前にも思ったが、10年たってもやはりそれしかないと思う。

## 『節目の10年にあたり』 営業局 若林 輝彦

節目の10年にあたり、当時の検証番組「なぜ私たちは間違いを犯したのか」を見返しました。被災地や視聴者の皆さまの言葉、社員の仲間の苦痛な表情を見て、10年経った今も、やはり胸が苦しくなります。

「二度と繰り返してはならない・・・」。

当時、指摘された「コミュニケーション不足」「当事者意識の欠如」「放送倫理教育の不徹底」をいつも念頭に置きながら、毎年この時期に反省と決意を確認しています。

「放送倫理を考える日」の集会や研修会等で、全従業員を教育し、風化させない努力を会社として継続しつつ、最も重要なことは、当時を直接知らない若い世代に、我々が生の声で伝えていくことだと考えています。

今、私が在籍する営業は、直接、番組制作には関わることは少ないですが、時事ネタ等で具体的に、放送・企業倫理を話し合うようにしています。

また、自分の仕事を「自分事」として責任を持ち、意見を言える組織作りを心掛けています。

若い世代に過ちを背負い続けてもらうのは心苦しいですが、「地域に貢献し最も信頼されるテレビ局」を具現化するために、東海テレビ局員としての自覚とプライドを持って、一緒に前を向いて進んで行きたいと思っています。

ぴーかん問題を起こして以来、東海テレビでは放送倫理を考える取り組みを全社的に行っています。この1年は新型コロナウイルスの影響で集会形式の行事は見送りましたが、放送倫理にもとることが起きていないかチェックするとともに、昨今話題になっているテーマで研修会を開くなど、意識向上に努めました。



**一人ひとりの倫理観を確認  
放送倫理を考える日関連行事の実施**  
コンプライアンス推進部 梅村 育宏

「メディア本来の役割とは何なのか、一人の放送人として何をすべきなのか、皆さんそれぞれに当事者意識を持って、これからも考え続けてもらいたい」

2020年8月4日、社長から全社に届いたメッセージです。東海テレビでは「ぴーかん問題」があったこの日を「放送倫理を考える日」と定めています。例年、この日は放送倫理と真摯に向き合う全社集会を開いていましたが、2020年のこの時はコロナの只中でした。感染予防を考え、この年の集会は見送ることに。一方、冒頭の社長メッセージとともに、全社で当時の記憶を風化させず、放送の公共性や公益性、倫理観を改めて胸に刻む機会としました。

またこの日に先立ち、7月には各部署ごとに放送倫理について考えました。同時に新型コロナ禍においてテレビが何ができるのかを考える時間も設けました。社内外での感染対策、取材時・スタジオ収録時における留意点、ヒヤリ・ハット事例などについて幅広く話し合いました。結果は文書にして社内公開し、部署をまたいで関係者全員で共有しました。

これからも一人ひとりが当事者意識を持ち、放送に対する倫理観を磨きながら、視聴者の皆さまに役に立ち、感動を与えられるような活動を続けていきます。



**2020年度放送人研修会  
番組と広告の識別**

番組審議室 水城 浩一

2020年度の「放送人研修会」のテーマは、『番組と広告の識別』でした。2020年12月11日、フジテレビジョン考査・放送倫理部の齋藤淳部長と河原尚美さんを講師に、新型コロナウイルス感染防止のため、オンラインで人数を限って開催しました。

番組と広告の識別の問題をめぐるのは、2019年度以来、BPOの放送倫理検証委員会が3社3番組に対し放送倫理違反の判断を出しています。特定の企業の商品やサービスの取り上げ方は、民間放送として避けることのできない課題です。

齋藤部長からは「放送法12条 広告の識別措置」の趣旨や、BPO放送倫理検証委員会が「放送倫理違反」としたポイントなどについて解説をいただきました。番組全体が広告として視聴者に受け止められることのないよう、社内のさまざまな立場の人が意見交換し、「総合的に判断」することが重要として、継続的に「番組と広告」の問題には留意すべきとアドバイスがありました。

また、河原さんの講義でも具体的な事例を挙げながら、「番組を作る側の発意」と「視聴者にとっての有益性」など、番組としての必須条件が説明されました。

番組と広告は識別されるべきものとして、法律でも記されている中、「広告ではないか?」と誤解されるような番組を制作・放送してしまうと、視聴者や社会の信頼を得られなくなります。さらに当社だけでなく民間放送のメディアとしての根幹を揺るがす恐れもあります。日本民間放送連盟が2017年5月に公表した文書では、番組内で商品、サービスを紹介する場合は一方的なPRにならないよう、視聴者への有益な情報提供であり、視聴者に対してフェアな表現であることなどが求められています。今後も、東海テレビでは、視聴者の皆様に対して有益な情報提供となる番組をお届けできるよう努めていきます。

2020年12月11日  
2020年度放送人研修会 より



## コンプライアンス責任者会議

東海テレビではライン部長がコンプライアンス責任者として、部員の監督・指導を行っています。「コンプライアンス責任者会議」は、各部長のほか、グループ会社の担当者も加え毎年4回、原則3カ月ごとに開催し、法令順守や放送倫理、情報セキュリティなどに関わる事項について、話し合いの場を設けています。従来は部長全員が一堂に会し情報交換をしていましたが、コロナの影響でこの1年はすべてリモート形式となりました。各部署で発生したトラブルやヒヤリ・ハット事例のほか、この1年では「新型コロナ対策」、「公式SNS運用の留意点」、さらにはBPO事案などについて時間を割いて議論を深めました。番組制作に関



2021年6月1日開催の  
コンプライアンス責任者会議

わっているか否かにかかわらず、放送に携わる「放送人」として意識をしながら業務に当たれるよう、この会議を運用しています。



## コンプライアンス委員会

また、東海テレビではコンプライアンス責任者会議のほかに、役員・局長・グループ会社役員などをメンバーとした「コンプライアンス委員会」を原則半年に1回開催しています。コンプライアンス責任者会議の内容を把握することで、グループ全体で問題意識を合わせるようにしています。



2021年3月16日開催の  
コンプライアンス委員会

このほか、顧問弁護士も参加しており、新型コロナ禍のテレワークに関する注意事項や、SDGsの取り組みなどについて、企業法務的見地からレクチャーしていただきました。



## 第三者機関 オンブズ東海

ぴーかん問題を契機に、2012年に発足した第三者機関「オンブズ東海」の活動は今年10年目を迎えました。オンブズ東海は現在、マスコミ・法律・消費者経済の専門家の3人に委員を委嘱し、東海テレビの番組やイベントの制作過程などについて、それぞれ専門的な立場からチェックし、意見をいただいています。テレビをめぐる環境が大きく変わる中、番組・イベントだけではなく、最近ではSNSや映像配信など、通信に関わる事項もチェックの対象になっています。委員からの意見は適宜社内にはフィードバックし、「転ばぬ先の杖」としています。

### オンブズ東海委員の皆さま

坂井 克彦 委員長 (株)中日新聞社相談役  
橋本 修三 委員 弁護士  
東 珠実 委員 椋山女学園大学  
現代マネジメント学部教授



2021年6月14日開催のオンブズ東海



## その他の主な取り組み

### ≪2020年≫

- 10月10日 新任部長級社員ハラスメント研修
- 11月 4日 個人情報保護・情報セキュリティに関する内部監査(～11月30日)
- 12月 2日 業務リスク調査(～2月9日)

### ≪2021年≫

- 4月 1日 グループ会社新入社員研修
- 4月 2日 東海テレビ新入社員研修

## 第三者意見 I

### 「思いを新たに 語り継ぐ」

オンブズ東海委員長 坂井 克彦

(株)中日新聞社相談役

「八月や 六日 九日 十五日」という句があるんだそうです。8月の6日は広島原爆の日、9日は長崎原爆の日、そして15日は天皇がラジオを通じて国民に日本の敗戦を伝えた日です。あの戦争が終わって、今年で76年ですが、今も、新聞、テレビなどは、この時期、たくさんの戦争特集を組みます。おそらく日本にある数多くの記念日のなかで、この戦争特集ほどたくさんの量の情報を流す番組はないと思います。あの戦争というのは、それだけ、忘れてはいけないことであり、日本人に反省を促すことが多かったと思わずにはられません。

そして、同じ8月、私たち東海テレビに関わる人間は、私たちにとって特別の、もう一つの記念日を迎えます。2011年8月4日のあの事件です。

あってはならないことが起きたことで、会社全体がひっくり返るかのようだったと、当時を知る人は言います。世間的にも注目を集めた事件でしたが、ことは、マスコミとしての信用問題です。

問題発覚後、すぐ、社内にはいくつかの会議、委員会が立ち上がり、改善策や善後策がスタートしました。そして、今年で10年。東海テレビの皆さん、本当によく頑張ったと思います。今では、名古屋のマスコミ界の中でも、この事件を知らない人が増えているでしょうが、それはそれでいいのだと思います。東海テレビ関係者が年に一度、8月4日にあの事件を思い出すこと、それだけで、この記念日の存在価値はあると思います。

今の日本は、毎日が何かの記念日です。うち冒頭に書いた戦争終結の記念日は日本の現在過去未来を見るのに、全国民にとって大切な日でしょうし、何年か前、俵万智さんが歌った「この味がいいねと君が言ったから 7月6日はサラダ記念日」の世界は、とてもうらやましい平和な記念日です。

そして、これらの記念日は、一見バラバラに見えるのですが、最低、一つだけは共通するものがあります。それは「記念日を意識することで、思いを新たにする」ということです。記念日があるから、その事件、出来事を思い出すのです。思い出し、語り合い、反省し、また一つ進歩するのです。

「2011年8月4日午前11時3分」。

東海テレビの社員、関係者の皆さん、10年前を思い出し、語り合ってください。

坂井 克彦（さかい かつひこ）氏

1945年生まれ。1967年中日新聞入社。主に編集部門を歩み、ニューヨーク特派員や東京本社編集局長を歴任、常務取締役、中日ドラゴンズ社長などを経て2014年から現職。



SDGs = 持続可能な開発目標は環境・貧困・差別など17の地球規模の課題を定め、2030年までに解決するために行動するものです。東海テレビはこのたびSDGsに取り組むことを宣言しました。この地域のメディアとして関連の情報を発信し、地球にやさしい、平等な社会の実現を後押ししていきます。



少しずつできることから頑張ります  
SDGメディア・コンパクト加盟  
SDGs推進チーム 原 崇



みんなでつなぐ17の未来  
TRY! SDGs  
制作部 高村 幹



東海テレビは2020年10月、SDGsの取り組みに参画することを宣言し、翌2021年1月、国連のSDGメディア・コンパクトに加盟しました。このSDGメディア・コンパクトは、「貧困」「教育」「環境」「ジェンダー」など、国連が掲げた2030年までに解決すべき地球規模の17の目標について、「メディアの力でみんなに知ってもらおう」という役割を担っています。東海テレビでは、この地方でSDGsの活動に積極的に取り組んでいる企業・団体・個人を視聴者の皆さんに紹介しています。一方社内では、SDGsを宣言した直後、部署を横断するチームを作り、東海テレビとして取り組むべきSDGsの活動を検討しました。今は「未来の子どもたちへ」「地域とともに」「共生を目指して」の3つをキーコンセプトに活動を続けています。

私たちが実践するSDGsは「S=少しずつ、D=できることから、Gs=頑張ります」です。身近なところから地球にやさしいことを考え、情報を発信し、アイデアを形にしていきたいと思っています。

「みんなでつなぐ17の未来」は、SDGsについて東海テレビが初めて制作した番組でした。紹介したのは東海三県でこの課題に積極的に取り組んでいる行政や企業、教育現場など4か所。中川翔子さんと照英さんがナビゲーターとして現地に赴き、地道に取り組むSDGsを体感、その重要性をレポートするというものでした。取材先のそれぞれが知恵を絞り、身の回りのことから地球規模に関わる取り組みを行っていることを、視聴者に少しでもお伝えできるよう工夫を凝らしました。



番組の制作過程で、ある子ども施設の方から言われたことが印象に残っています。「施設名を隠し、子どもたちの顔を映さなければ番組で紹介できるかも知れません。ただそこまでして、活動を知ってもらうメリットはありません。一人でも多くの貧困が無くなり、飢餓が無くなれば、それで私たちは良いのです」・・・SDGsのあるべき姿を改めて教えていただいたような気がします。

17の項目にはさまざまな目標が含まれています。東海テレビとして1つでも多くの活動を紹介し、1人でも多くの方々に知ってもらうことが、メディアとしての務めだと思います。そして東海テレビ自身が、さらに私自身も何が出来るのか。無理をせず、まずは目の前のことから始めようと思います。

17の項目にはさまざまな目標が含まれています。東海テレビとして1つでも多くの活動を紹介し、1人でも多くの方々に知ってもらうことが、メディアとしての務めだと思います。そして東海テレビ自身が、さらに私自身も何が出来るのか。無理をせず、まずは目の前のことから始めようと思います。





ドラマの宣伝で箸を配る！  
ドラマの宣伝で小さな社会貢献  
宣伝部 鎌田 麗香

2020年10月に放送されたオトナの土ドラ「さくらの親子丼」。子どもシェルターが舞台で、子どもの虐待・貧困について考えるドラマのため、宣伝部では「社会貢献×宣伝」という観点で、多くの人にドラマを知ってもらおうと、間伐材を使用した割り箸を子ども食堂に配布しました。



お願いしたのは「郡上割り箸」という、岐阜・郡上のスギの間伐材を使って箸を作っている会社で、袋詰めも地元の福祉施設で行ってもらいました。箸は1万膳発注、全国の子どもの食堂の

支援を行うNPO法人「むすびえ」に送付先を募集してもらったところ、応募が殺到し、3時間で予定数に達しました。時はコロナ禍…子ども食堂が開催できず、食材やお弁当の配布に切り替えていて、割り箸は必需品。さらに、イチーの絵がついたいつもと違う割り箸を添えることで、子どもに喜んでもらえるだろうと思った食堂の方もいたようです。

こうして、全国50か所の子ども食堂に一斉に配ることとなりましたが、せっかくならイチーに直接渡してもらおうと岐阜の「ときつ子ども食堂」にお邪魔しました。子どもたちはもちろん、ボランティアとして働いているスタッフの方々にも喜んでいただけました。

温かい食事や、食事しながらの会話が難しくなっている今、割り箸やイチーを通して少しばかり心が和らいでくれたようで何よりです。折を見て支援をしていければと思います。



ドラマを通して自分事に感じるSDGs  
オトナの土ドラ「さくらの親子丼」  
東京制作部 中頭 千廣



撮影セットにポスターを掲示

2020年放送の「さくらの親子丼」のシリーズ第3弾は、貧困や虐待等で行き場を失った子どもたちの駆け込み寺である「子どもシェルター」が舞台でした。前作に反響をいただいてから2年を経て、再び全国に点在するシェルターへ取材。各々特色は異なる

れど、共通していたのは、働く方の明るさと子どもたちへの真っ直ぐな思いでした。その思いをお節介おばさんの主人公・さくらや物語に反映し、社会派人情エンターテインメントドラマとなりました。

このドラマで、子どもの貧困対策に取り組む内閣府の「子供の未来応援国民運動」とSDGsのコラボレーションを実施。内閣府の担当者が前作を見て下さっていて、コラボへの道は順調にスタートしました。しかしコロナ禍となり…予定したタイアップ事業は全てキャンセル、打ち合わせすら目途が立たない中、何ができるのか模索が続きました。

結果、相互SNSで情報発信、ドラマ劇中で運動のポスター掲出、主演の真矢ミキさんと坂本特命担当大臣の対談が実現し、同運動YouTubeチャンネルで配信しています。

フィクションであるドラマには、まるで自分事のように身の回りや未来を想像させてくれる力があると思います。テレビでの出会いをきっかけに日常の小さなアクションへ繋がったら幸いです。



© Mercis bv  
対談記事掲載の  
「国民運動」パンフレット



## SDGs と地域報道

## ミライノニュース

報道局 伏原 健之

2020年12月に始まった「ミライノニュース」は、夕方の「ニュースOne」の中で流行りのSDGsについて取り上げていこうという企画である。私はテレビマンとして時流にはいち早く乗るべきだと思っている。一方で報道マンとして時代に流されないテーマに取り組まなければならないとも思っている。



Waphyto 森田敦子さん



クラタベッパー 倉田浩伸さん

駆け出しの頃、ある先輩に「報道の使命は地域の人たちの生命と財産を守り、ふるさとの伝統、文化を継承していくこと」だと教えられた。それは今風に言えば「持続可能な社会をつくる報道」ということなのかもしれない。ふり返ってみれば、私たちの先輩たちは60年も前からSDGsな報道を続けてきた。たとえば、四日市公害報道は環境問題の先

駆け出しの頃、ある先輩に「報道の使命は地域の人たちの生命と財産を守り、ふるさとの伝統、文化を継承していくこと」だと教えられた。それは今風に言えば「持続可能な社会をつくる報道」ということなのかもしれない。ふり返ってみれば、私たちの先輩たちは60年も前からSDGsな報道を続けてきた。たとえば、四日市公害報道は環境問題の先

「ミライノニュース」はSDGsへの取り組みを紹介するのではなく、実は人物に焦点を当てたいと思っている。この地域にも、さまざまな課題に気づき、悩み、考え、行動している人たちがたくさんいる。彼ら彼女らはとにかく魅力的である。その声を聞き、考え方、生き方を知ることが何よりも大切だと思っている。



ヘラルボニー 松田崇弥さん



尾州のカレント 彦坂雄大さん

「報道の使命」などと、上から目線で言うてはいるものの、実際には「ミライノニュース」を通じて学ぶことばかりである。これから私たちはどう生きていくべきか教えてもらっている。地域の人たちとともに、この時代の課題を見つけ、考え、行動して、未来へ繋いでいくこと。「ミライノニュース」を作りながら、地域報道の原点を見つめ直したい。



## 失敗してもいい もがくことが大切 チョコレートな人々

報道部 鈴木 祐司

2021年3月に放送した「チョコレートな人々」は、愛知県豊橋市に本店がある「久遠チョコレート」代表の夏目浩次さん（44）とスタッフに密着したドキュメンタリーです。世界のカカオに、ドライフルーツやナッツを混ぜ合わせる「テリーヌチョコレート」が看板商品。開業から7年で年商10億円以上、北海道から九州まで工場と店舗は51拠点にまで成長しました。

夏目さんは「失敗してもいい。もがくことが大切。誰かを排除するのではなく、凸凹違う個性を組み合わせることで企業は成長し、イノベーションが起こる」と熱く語ります。



従業員約500人のうち、心や体に障がいがある人が約300人。シングルマザーやLGBT、引きこもりの人など多様な人も働き、誰もが最低賃金以上、ジェンダー平等も実現し、やりがいがある職場を作るなどSDGsの目標をいくつも達成しています。

夏目さんは、パン屋、印刷屋、飲食店…そしてチョコレート店と、さまざまな事業を起こし、失敗もしながら“障がいがあっても稼げる職場”を全国に増やしてきました。「この人が日本の福祉を変える」。私は17年前から取材し、ニュースで伝えることで応援してきました。より良い世の中に繋がっていくと信じているからです。「失敗してもいい、もがくことが大切」。信頼されるテレビマンを目指し、大切なことを学ばせてもらっています。



## 多様性あるイベントをサポート e-sports

事業開発部 深谷 弘

一般社団法人日本福祉協議機構が設立した、e-Sportsを通じ、年齢や性別・さまざまな障がいや国籍を問わない多様性ある社会の形成を目指すプラットフォーム「Edges (エッジス)」に対し、AICHI IMPACT 2021のe-Sports大会への競技や運営参加を呼びかけ、社会参加をサポートしました。



## 世界の子供にワクチンを ペットボトルキャップ回収

東海テレビでは2021年1月から本社1階ロビーに、ペットボトルキャップの回収容器の設置を始めました。集めたキャップはリサイクル業者に納入、1kgあたり10円の寄付金に換算されます。これまでに85kg、36550



本社1Fに設置した  
キャップ回収容器

個相当を納入し、850円分の寄付を行いました（2021年6月30日現在）。ポリオワクチンであれば、1回の接種が約20円で、累計で43回分に相当します。

ごみとして捨てられていたキャップですが、小さなアクションで、誰かの役に立つよう、引き続き取り組んでいきます。



## 『大きな目と多くの目』 東京支社 青黄 昭彦

毎日あふれかえるメールの中、番組の取材先リストには特に目を配ります。未然に競合提供社のバッティングを防ぐ為です。通信手段のDX化は、コロナ禍と相まって加速しています。会議はリモートを余儀なくされ、会食もままなりません。不自由さを改善し、利便性を追求する流れには抗えないのでしょうか。従来の対面ビジネスの転換期なのでしょうか。いやそうでもないです。感染対策を講じながら必死に作り続けるドラマに感動しなかったのでしょうか。芸人が必死に汗をかいて笑いを生み出すバラエティに癒されなかったのでしょうか。人との接触が減る中、笑ったり、感動したり、心に栄養をくれたのがテレビであり、それを私たちは作っているのです。「ぴーかん事件」から10年。奇しくも同じ東京支社勤務となりました。ほんのささやかでも、人々に笑顔を届けられる仕事に誇りと責任をもち続けていきたい。決して忘れてはいけない事件を起こした私たちだから。日々コツコツ当たり前のことから。

## 『メディアに必要なこと…』 報道局 岡田 健嗣

「東海テレビにとって、原発事故は所詮、他人事ですもんね。だからあんな放送ができるのですね」。当時、東京編成部にいた私が、ぴーかんテレビの放送事故のあと被災放送局の一つに謝罪に行った時に、先方からかけられた言葉だった。ひたすら頭を下げるしかなかった。

震災から10年がたった今年3月、新聞のとある記事を目にした。「毎年3月だけきて、“この町は時がとまったまま…”と慣用句のような記事を書くメディアは信用できない。たとえ人が住めなくても草がどんどん生え、建物はさらに崩れている。時は確実に流れ、変わっているのだ。3月だけ来る人にはわからない」と福島の人々のため息交じりの言葉を紹介している。記者はもちろん災害や事件の当事者になることはできないが、より当事者に近づこうとする“当事者性”が必要と教えてくれた先輩記者の言葉を思い出した。10年前、被災局員に言われた「所詮、他人事ですよ」の言葉と重ね合わせ、改めてその教えを心に刻みたい。

## 『かゆい所に手が届く存在に』 スポーツ局 片島 豊久

「大変なことが起きました」ぴーかん問題当時、私は編成部にいました。打合せ中に呼ばれVTRで映像を目にした時、俄かには信じ難く同時に戦慄が走りました。その衝撃は今もはっきりと覚えています。当社への非難が殺到する中、事後対応を協議するために連日開かれた会議での怒号や嗚咽…。あの身を切られるような空気も忘れることができません。コツコツと培った信用も一瞬で吹き飛ぶこと。過ちを犯した後の謝り方。ネット社会の怖さ…。大きな代償をもって、改めて多くの教訓を学びました。

我々の仕事はこの地域の人々に親しまれ、必要とされて成り立ちます。常に地域の人々の思いや営みを想像し、より楽しく、より必要だと思ってもらえる番組や情報を提供し続けたいと思います。「かゆいところに手が届く」。そんな存在でありたいと考えます。

東海テレビでは、視聴者の皆さまの多様な要望などを踏まえ、新しい番組を制作・放送していますが、一方で長年にわたり、皆さまの支持をいただきながら放送を続けている番組もあります。ここでは、番組を通じた地域貢献の活動についてご報告いたします。



コロナ禍に“オアシス”のような時間を  
2000回 迎えた「スイッチ！」

制作部 伊藤 芳人



449 通のコトバと  
スキマスイッチのお2人

新たな取り組みを始めた東海地方の生産者の人々を紹介するというもの。名古屋の帽子メーカーのご家族や三重の水産業者さん取材させていただきましたが、どの方も、困難に直面しながらも、アイデアと努力で明るく暮らしていて、その姿に胸が熱くなりました。

コロナ禍でどんな情報を取り上げるべきか？この1年間、常に悩んでいました。世の中は暗いニュースばかり。こんな時代だからこそ、東海地方の人の心に少しでも「光」を届けられれば・・・という思いで、番組作りをしています。

4月には、番組のオープニングソングを新しくしました。その名も「スイッチ！」。地元出身のスキマスイッチに書き下ろしてもらったこの曲は、歌詞を、東海地方の人々から募集しました。「前向き」で「元気が出る」コトバを募集したところ、449通も集まりました。

コロナ禍の今、人々がどんな言葉で前向きになれるのか？知ることができた一方で、視聴者からは「曲作りに参加できて楽しかった」といったメッセージが多く寄せられ、今後の番組づくりのヒントをつかんだ気がしました。

現在、朝9時50分に東海テレビをつけると、明るい音楽にのせて沢山の前向きワードが流れてきます。見るとちょっと元気になれる、そんな“オアシス”のような時間を届けていければと思います。



子どもの未来を応援し続けて30年  
すくすくぼん！

制作部 海野 仁志

毎週日曜日早朝に放送している子ども向け番組「すくすくぼん！」。地元で育った方たちなら「じゃんけん、すくすく♪」という音楽を一度は聞いたことがあるのではないのでしょうか？その「すくすくぼん！」が今年、1991年の放送開始から30年を迎え、5月8日に30周年スペシャル番組を放送しました。

放送開始当初は大魔王、ハチャマン、キンチャック、モモコという4体の着ぐるみが地元の幼稚園や保育園を訪ね、子どもたちとダンス対決をするミニ番組でした。東海テレビのアナウンサーが番組内で放送する歌を歌い、CDにもしました。その後、放送時間が伸び、ダンス以外に子どもが知的興味を持ちそうな、工作やパントマイムのコーナーなどを増やしていきました。また、子どもたちに親しみを持ってもらうため、番組の色合いをカラフルにしたり、短くても「楽しい」と思ってもらえるようにオムニバスの番組作り、日曜日の朝に親子で見て楽しめる料理や工作などのコーナーなど、番組を観たことがある子どもたちが大人になった時に、少しでも“楽しかった記憶”として残るといいな、という思いで番組作りをしてきました。



現在は「五感六感」をテーマに、子どもが目や耳など全身で「感じる」ことを目的としたコーナーで構成しています。

30年間、番組が一貫して大切にしてきたのは「子どもの成長を応援すること」。大きくなった時に、五感をフルに働かせ、さまざまなことを感じるこの手助けになればと考えています。



「すくすくぼん！  
30周年スペシャル」より

その女  
ジルバ

コロナ禍でのドラマ撮影  
その女、ジルバ

東京制作部 遠山 圭介



2020年11月頭にクランクインした「その女、ジルバ」。年末に向け新型コロナウイルスへの危機感が高まっていた時期であり、また高齢の出演者が多

かったことから、細心の注意を払って撮影に臨みました。クランクインの2週間前から毎日検温をし、それを記録。またセット設営後は医療指導の医師と看護師に現場立ち合いを依頼し、換気や消毒の状況などマニュアルに沿って点検してもらいました。撮影時には1～2時間おきに換気のための小休憩をはさむことを徹底。入口には消毒液と消毒マットを常備、食事スペースも間隔を取り、対面にならないよう全員が同じ方向を向いて座るような場所を設置するなど、考え得る最大限の対策をして撮影に臨みました。その結果、当初予定していた撮影期間を1か月もオーバーする事態となってしまいましたが、何とか無事に放送を終えることができました。

以前までの撮影スタイルとは打って変わって、かなりの負担を強いる状況となりましたが、何よりもありがたかったのが、スタッフ・出演者から誰一人文句も出なかったこと。全員が状況を理解し、いいドラマ作りのために1つになれたからこそ乗り切れたのだと思っています。改めてテレビの現場は、一人ひとりの努力の賜物だと痛感させられました。



地域の発災時に備えて  
防災特番・ヘリ訓練

報道部 服部 篤幸



番組内で紹介した  
コロナ対策を講じた避難所

大きな災害が起こった時の生活を想像したことがありますか？東日本大震災から10年で、「新型コロナウイルス対策の避難所」をテーマに番組を制作しました。番組では

名古屋市内の体育館を貸し切り、専門家監修のもと、コロナ対策を講じた避難所を再現しました。そこで東海地方在住の3人のタレントが避難所生活を体験しました。防災意識の高いロンブー田村淳さんをMCに、名古屋大学地震工学専攻の福和伸夫教授も招き、避難所生活を考える時間になりました。コロナで新しい生活様式に変わる今、避難所は進化していますが、最も変わらなければいけないのは、私たちの防災意識です。南海トラフ巨大地震の脅威が日に日に高まる中、防災意識の向上が必要です。

一方、発災時の報道をよりきめ細かく届けるための取り組みも進めています。ヘリコプターの空撮映像を在名4局で共有する「名古屋モデル」は2019年開始。年に一度行う訓練を2020年12月に実施しました。地震は午後0時50分、和歌山県南方沖で発生。マグニチュードは8.7、愛知と三重で震度7を観測。その2分後、大津波警報が出るという想定でした。津波情報を基に、津波からの避難を呼びかけます。「名古屋・知多」「三河」「三重北部」「三重南部」の4エリアに分けて撮影の連携を確認し、大規模地震に備えています。



2020年12月12日に実施した  
名古屋モデル訓練



未来へつなぐタスキ  
愛知駅伝2020特別編  
スポーツ部 小川 由唯花

2005年に開催された「愛・地球博」の記念事業として2006年に始まった「愛知駅伝」。愛知県全54市町村が参加し、子どもから大人まで全ての世代がチーム一丸となってタスキをつなぐこの大会は、今や毎年恒例になりました。しかし、15回目の開催を目指していた2020年は、新型コロナウイルスの影響により大会が中止に…。それでも、この大会を絶やすことなく未来へとつなごうと制作したのが今回の「特別編」です。今年にかけていた選手の思いを取材したり、「愛知駅伝」でつながった絆を絶やさぬよう独自で大会を開催した清須市に密着したり…。例年の中継に比べると30分という短い時間でしたが、「愛知駅伝」を通して生まれたランナーの方々の思い・絆・挑戦を届けることができたのではないかと思います。

そして番組の最後に流したのは、54市町村のランナーがタスキをつなぐエンドロール。各地に赴き撮影をした際には、担当者の方からも出演してくれたランナーの方からも「大会中止は残念だったけど、こういう形で今年も参加できて嬉しい」という声をたくさんいただき、「愛知駅伝」を続けることの意義をひしひしと感じました。今後もこの大会を絶やすことなく、伝え続けていきたいと思ひます。



人間教育の向こうに勝利がある  
ドキュメンタリー 白球レター  
スポーツ部 伊貝 純矢

今回のドキュメンタリーの舞台となった愛知黎明高校野球部・金城孝夫監督と私の出会いは去年6月に遡ります。コロナで甲子園が中止となり大きな目標を失った高校球児たちの夏を記録しようと思い取材先を探していると、全国制覇を成し遂げたこともある名将でありながら、“人間教育”に重きを置き、決して勝つことだけに捉われない指導方針を掲げる金城監督に出会いました。

金城監督の指導方針は「野球の原点は日常生活にあり」「いくら野球の技術があっても、基本的なルールが守れない選手は試合で使わない」など、日常生活に徹底し



愛知黎明高校野球部  
金城孝夫監督

たこだわりを持っていて、練習中の指導でも独自の科学的トレーニングや特別な練習法は見受けられません。そんな指導でありながら、去年夏の独自大会でも県大会ベスト4に導くなど本気で甲子園を目指しています。“人間性”を育てながらもチームを強くする指導方針に興味を持ち密着取材することを決めました。



寮生活の部員に掃除の指導をする  
金城監督

番組を通して、「野球の原点は日常生活にあり」という考え方は、野球に限らず自分たちにも当てはまるよね！ということが伝わればいいなと思って制作しました。

## 『未来の番組制作を支える人たちへ』 制作局 横田 誠

この10年、映像コンテンツの需要が拡大する一方で、働き方改革、番組制作費の圧縮など、制作現場の環境は年々厳しくなっています。

そんな中でも一番重要な事は、どんなに時間に追われていても、番組に真実でないことが紛れ込まないよう、手抜きをせずに考え、相談し、確認するという事。疑念を持つ部分が少しでもあったら、一人でも納得しないスタッフがいたら、改善するまで放送しない勇気を持つこと。それを番組制作の最低限の習慣にしていきたいと思います。

その上で、「この番組を胸を張って、家族や友達、彼氏彼女に見てほしいと思えるかどうか」を考えましょう。自分にとって身近な人に自慢したくならないようなものだったら、一般の人にはきっと響きません。自分の思いを、いかにドラマティックに伝えられるか。それを考える時間こそ、作り手の醍醐味です。

そんな丁寧な番組作りを、今の時代に合わせて時間、予算共に効率よく行うためには、結局は“経験”を積み上げていくしかないのかもしれませんが。できるだけいい環境を作るように努力します。でも最初は辛いかもしれません。しかしどうか諦めないでください。他にはない贅沢な醍醐味を味わうまでは。

## 『問題からの学び』 事業局 吉田 明弘

携帯電話の向こうからの「信じられない映像が出ました」という震えた声その一報だった。それから、全社挙げて対応に追われる日々が続く。この東海テレビ史上最大の危機は自ら招いたもので、信頼の崩壊は一瞬で始まった。

公共の電波を預かる責任の重さ、テレビの影響、ネットの怖さ、私たちはこの問題から多くのことを学んだ。正しい放送人とは？と自問自答を繰り返し、改めて「誠実な姿勢」で取り組むことの大切さを再認識し、常に「誠実」を意識し、だれに対しても、どんな仕事でも「誠実」に向き合うことを心掛けてきた。

一度失った信頼の回復には多くの時間が必要で、いまだ問題を起こす度に「あのぴーかんテレビの東海テレビ」と非難される。視聴者を裏切った重みを思い知らされ、決してあの日のことを風化させてはいけないと強く感じている。知らず知らずのうちに人を傷つけていないか。この番組、このシーンを見て視聴者がどう感じるのかを常日頃から考えるようにしている。

精神的にも肉体的にも疲弊する中、社員一人ひとりが会社の危機を乗り越えるために知恵を絞って協力した経験は、東海テレビの財産となっていると信じている。

## 『放送の持つ影響力の大きさを念頭に』 技術局 白井 正年

アナログ放送終了という一大事業を成し遂げ一息ついたところで「ぴーかん問題」は起こりました。2011年8月4日、事務所奥のスペースで打合せ中に報告があり、すぐさま内容を確認しました。何ということをしてくれたんだとまず最初に思ったことを記憶しています。当初、これほどの大ごとになるとは思いませんでしたが、あれよあれよという間に抗議が増え、事の重大さを認識する事態となりました。視聴者からの抗議の電話を何度か受けましたが、大変厳しいご意見もあり、信頼というものは、こんなにも簡単になくなってしまふものかと愕然としました。これは、皆がわれわれに正確で役に立つ情報や娯楽の提供を期待していることの裏返しで、その期待を裏切ったときに、大きなバッシングにつながったと考えています。

不特定多数に対して瞬時に情報を送り届ける放送の持つ影響力の大きさは、使い方を間違えるととんでもないことを引き起こします。これを念頭に、これからも責任感を持って業務に取り組んでいきたいと思えます。

東海テレビでは、今年度から3カ年計画で進めている活動の基本理念の中で「地域密着の最優先」を柱の一つに掲げています。番組を通じ情報や娯楽を提供するだけでなく、時には視聴者の皆さまと直接触れ合う機会を設けるなど、放送の他にもさまざまな活動を行っています。



街を楽しくするアプリを目指して  
コンテンツ配信サービス **Locipo**  
コンテンツ事業部 安田 俊之

名古屋に本社を置く民間放送局4社（東海テレビ、中京テレビ、CBCテレビ、テレビ愛知）が共同で2020年3月にスタートした「Locipo」。動画を中心としたさまざまな情報を配信する公式サービスです。ローカル局が複数で動画配信プラットフォームを構築し、サービスを提供するのは国内で初めてです。

Locipoは、きめ細かく地域の情報を発信することにこだわりながら、4社が放送した番組の見逃し配信の他、放送に出していない情報、WEBで展開しているコンテンツ等を1つのサービスに集約し、カテゴリーに分けて配信しています。

「テレビ(番組内のコーナー含む)」「ニュース」「ライブ」「どこ行く?」「よみもの」の5つのカテゴリーを提供し、緊急時にライブ配信する機能も備えています。



**Locipo** ロキポ

「テレビ」では人気番組を、「ニュース」では地域に根差したHOTな情報を4局で集約し配信しています。「ライブ」ではコロナ感染に関する愛知県大村知事の会見、名古屋市長選などを配信し、地域の方にいち早く必要な情報を届けると共に、4局共同制作番組「SKE48の名古屋4局のアナウンサーを8週連続で呼び出したった。」を配信し、地元アイドルのバラエティ番組を提供しました。まだまだ発展途上ではありますが、今後は番組と連動したプレゼント応募ができるなど、さまざまな機能を追加して、「街を楽しくするアプリ」を目指します。

また、文化庁文化芸術収益力強化事業の一環として、密着取材番組「ボイメンチャレンジ2021始動」を制作・放送するとともに、ボイメンLIVEを生配信しました。



コツコツ毎日続けて2000回  
くらしの作文 新聞音読  
アナウンサー 庄野 俊哉



新聞音読のサイトをご覧ください  
なる方はこちらをクリック

中日新聞の読者コラム「くらしの作文」を音読し、東海テレビのホームページでほぼ毎日掲載してきた「新聞音読」。2015年10月にスタートしたこの取り組みは2021

年6月2日、音読したコラムの数が2000作品となりました。2000通りの物語に触れる機会をいただいたことに感謝するとともに、読み手としての責任の重さを改めて痛感しています。

音読を続けながら、5年前からは地域に出向いて「音読の会」も開き、発声方法から朗読のポイントを伝える取り組みも実施しています。名古屋市守山区では区民を対象に「音読リーダー」を養成しまし



2000作品目の音読を収録中の  
庄野俊哉アナウンサー

た。その結果、一昨年からはリーダーたちが守山区内の高齢者サロンにチームで出向き、新聞の音読をプログラムに組み込んだ活動を続けるなど、音読指導のバトンを受け継いでもらっています。

一方、コロナ禍で対面講習できなかった時期は、受講者に電話で指導する「電話音読」に変更。今やリモートと言えば、オンライン会議アプリが主流ですが、受講者の要望に合わせてやり方で続けてきました。

コツコツ地道な活動ですが、ホームページを毎日見て下さる方、前日に原稿を送って下さる中日新聞のデスク、多くの方の支えがあって続けることができました。

今後もライフワークとして取り組んでいければと思っています。

## アナウンサーの絵本読み聞かせ イベント開催(2020年10月18日)

昨年10月、名古屋市教育委員会主催の読書活動推進イベントで庄野アナ・福島アナと絵本の読み聞かせを披露しました。題材は『ずっとまわっていると』。主人公のあかねちゃんが田んぼで一匹のカエルと出会い物語は始まります。

本番を迎えるまで庄野・福島両アナウンサーと共に、どのように読んだら子どもたちにこの絵本の面白さが伝わるか、のどかな田園風景を想像してもらえるかなど試行錯誤しながら作り上げていきました。迎えた本番。子どもたちの笑顔や真剣な表情から、絵本を読む楽しさや自然の素晴らしさなどがしっかり伝わったことを実感し、私も胸が熱くなりました。

SDGs時代に生きる子どもたちにとって、今回の読み聞かせが持続可能な社会の実現に向けた大切な気づきの一助となれたとしたらこれほど嬉しいことはありません。これからもCSR活動を通じてSDGsのゴールに向けた社会貢献に積極的に参加していきたいと考えています。

アナウンス部 勅使河原 由佳子

本来であれば、子どもたちにも声を出してもらいながら楽しんでもらうはずでした。

2020年10月18日(日)。新型コロナは第二波のピークを越え、我慢の成果が見えていた時期でした。とはいえ、今、子どもたちを集めていいのか、声を出せない状況で楽しんでもらえるのか…。

検温、消毒、換気、入場制限、手洗いタイムの確保など、思いつく限りの対策を徹底して迎えた当日。庄野アナ、勅使河原アナと絵本『ずっとまわっていると』の読み聞かせ。

子どもたちの様子を見ると…、等間隔に座って、声を出さず、時々大きくうなずきながら、じっとこちらを見て話を聞いてくれていました。子どもたちはちゃんと約束を守って楽しんでくれていたのです。

『待つことを楽しむ』という絵本のメッセージは、コロナ禍で我慢を強いられている子どもたちにも届いたと思います。そして『ルールの中で楽しもう』という子どもたちの姿勢から、我々大人にとっても学ぶことが多いイベントとなりました。

アナウンス部 福島 智之

## デジタル紙芝居 「ごん狐」の制作



コロナ禍でも楽しいひとときを家庭で過ごしてもらおうと、フジテレビがHP上で展開している“おうち応援プロジェクト！・デジタル紙芝居”。その制作に、系列局で初めて東海テレビの庄野俊哉・柴田美奈・前田輝3人のアナウンサーが参加しました。今回3人が取り組んだのは、愛知県半田市出身の童話作家、新美南吉の「ごん狐」の朗読です。いずれも愛知県出身というフジテレビの3人とともに、合わせて6人のアナウンサーがコラボしています。4月上旬、東海テレビとフジテレビをリモートで結び、合同で読み合わせ練習を実施、物語の雰囲気をつかんでから、朗読を収録し、5月上旬に完成しました。

デジタル紙芝居「ごん狐」は2022年5月17日までロキポでご覧いただけます。

コンプライアンス推進部 谷口 雄二

左の絵をクリックするとデジタル紙芝居「ごん狐」をLocipoでご覧いただけます

番組制作にあたっては新しいアイデアが常に求められます。そうした中、視聴者の皆さまはじめ社外から寄せられるご意見には、これからの番組作りに対する「気付き」がたくさんあります。これらを参考にしながら、一方で行き過ぎた表現で不快感を与えることにならないよう、より良質なコンテンツ作りに努めていきます。



### 視聴者対応窓口

ドラマ、ニュース、情報、バラエティ、スポーツなどさまざまな番組に対する視聴者のご意見は、「視聴者対応窓口」に電話、メール、お手紙などでいただいています。2020年度に窓口寄せられたメッセージは約2万5000件で、当社の番組への意見、出演者への応援、番組や企画の放送要望などの内容が届きました。番組内容へのご批判、ご指摘はもちろん、報道番組や情報番組などで展開される議論や発言に対する意見、出演者に対する質問など、番組に参加し意見を投げかけたいという視聴者も大勢いました。

また、昨年から続いている新型コロナウイルス感染症に関し、報道や情報、テレビ番組の制作手法や内容に対する意見が届いた一方で、有益な情報もたくさんお寄せいただきました。

視聴者の皆さまから寄せられたメッセージは番組制作者や編成担当者などにフィードバックし、今後の番組制作、番組編成の参考にしています。

視聴者対応窓口では、視聴者の皆さまのご意見、ご批判をしっかりお伺いし、社内に伝えることでより良い放送作りに役立てています。



### 自己検証番組「メッセージ1」

視聴者対応窓口へ届いたご意見は自己検証番組「メッセージ1」で紹介しています。この番組は毎月第4日曜日午前5時15分から放送、視聴者意見の紹介や問い合わせへの回答のほか、番組審議会の概要、東海テレビの各種取り組みなどを報告し、視聴者との「橋渡し」の役割を担っています。



### 社外モニター

東海テレビの社外モニターは各年度上期と下期、それぞれ10名の視聴者の方をお願いしています。1か月に4～5本の自社制作番組を視聴してもらい、率直なご意見をレポートしていただいています。2020年度は51番組についての批判、称賛、意見をいただきました。性別、世代、職業や居住地域など、さまざまな立場や環境から多角的な視点で多様な意見をいただき、番組制作のアイデアや番組編成のヒントにしています。

#### <東海テレビ 社外モニターを経験して>

- ◆ テレビに対して本音を伝えられる場である一方で、制作者が自分の報告書を読むことでとても責任を感じた。
- ◆ コロナ禍で、家族と一緒に番組を見る機会が増え、テレビを中心に家庭内のコミュニケーションをとるきっかけが増えたことは良かった。
- ◆ 離れて住む親が偶然同じ番組を見ていて、空間を共有できたようでテレビ番組には人をつなぐ力があると感じた。

#### <テレビの将来に望むこと>

- ◆ 今のテレビ番組は似通っていて寂しいので、各局の色を打ち出して、視聴者に受け入れられる楽しいテレビになってほしい。
- ◆ テレビ番組を見て、新しい知識を得たり、趣味やスポーツを始めるきっかけになる存在になって欲しい。子供たちが見て、夢を与えるきっかけになって欲しい。
- ◆ スイッチを入れると子どももお年寄りも誰でも、技術やセキュリティの心配なく楽しめるのがテレビだと思う。だからテレビの情報は正しく公正であって欲しいと思う。





## 東海テレビ放送番組審議会

東海テレビ放送番組審議会は、番組をはじめ放送全般についての客観的なご意見をいただく、法律に基づいた第三者機関です。東海テレビでは8月を除く毎月1回開かれ、当社の放送に関するご意見をいただいています。現在、審議委員は10名で、財界、学術、法曹、文化などさまざまな分野の方々に委嘱しています。性別比率はほぼ均等で年齢層も幅広いことから、多角的な視点で当社の放送を見つめていただいています。

昨年から続く新型コロナウイルス感染防止のため、愛知県に緊急事態宣言が発出されていた今年1月、2月、5月、6月は書面開催として、委員から審議番組のご意見をいただき、これに当社の担当者が答える形で実施しました。また、対面開催の審議会でも、感染防止のため出席者の距離を置き、換気の時間を設けるなどしました。

いかなる状況でも番組審議会を継続し、視聴者の皆様に受け入れられる番組、適正な放送を守るため、さらに今後のテレビのあり方を探るうえでもアドバイスやご意見、ご指摘を真摯に受け止め、信頼されるメディアとなるよう努めてまいります。

### <東海テレビ放送番組審議会審議委員のみなさん>

2021年7月1日現在（50音順）

伊藤 彰彦	委員	東海旅客鉄道(株)専務執行役員
岡田 さや加	委員	柳ヶ瀬を楽しいまちにする(株)代表取締役社長
桂 文我	委員	嘶家
後藤 ひとみ	副委員長	愛知教育大学特別教授
柴田 浩	委員	(株)名鉄百貨店代表取締役社長
鈴木 孝昌	委員	(株)中日新聞社取締役
竹松 千華	委員	(有)IDF代表取締役
福谷 朋子	委員	弁護士
水谷 仁	委員	中部電力(株)代表取締役副社長執行役員
山岡 耕春	委員長	名古屋大学教授



## 第三者意見Ⅱ 上智大学文学部新聞学科教授 音 好宏

2020年1月に新型コロナウイルス感染症の患者が国内で発見されて以来、この1年半にわたって、日本社会は「コロナ禍」に翻弄され続けてきたと言っても過言ではないだろう。それは放送界も同様で、新型コロナウイルス感染症の拡大防止の対応として、人との接触が基本であった放送現場のありようを早急に変革する必要性に迫られた。

現場での人と人との距離の取り方についての再考が求められ、密閉された空間を基本として設計されていたスタジオでは、リモートカメラの多用など、密を避ける取り組みが続けられた。社外での取材・撮影や営業現場でも、オンラインなどの通信機器の多用により、人との接触量を減らしての業務遂行が求められ、現場は知恵を絞ることとなった。

現在、国内でのワクチン接種が本格的に始まっているとは言え、新型コロナウイルスの封じ込めにはまだまだ時間がかかりそうではある。ただ、この1年半での経験は、放送界に多くの教訓を残したし、放送の今後にも示唆を残したように思う。

一つは、放送現場に求められた早急なコロナ対策の過程で、放送事業者内の対応を優先するあまり、その煽りが外部の制作会社や契約スタッフなど、現場の弱い部分に、より一層の負荷がかかる状況も生じているという。また、コロナ禍でフリーランスの労働環境の問題も顕在化した。総務省の「放送コンテンツの適正な製作取引の推進に関する検討・検証会議」では、これらの問題が取り上げられ、ガイドラインに基づいた改善が求められている。

他方で、コロナ禍によって私たちのメディア利用行動も変化。ステイホームによるテレビ接触時間は増加したが、より顕著な変化を見せたのは動画配信サービスへの接触時間の急増である。マクロ経済連動型ビジネスの民放テレビは、コロナ禍で視聴時間の増加傾向は収益増に結びつきにくい分、動画配信の伸長は脅威だろう。特に動画配信サービスでは、番組やCMの考査など、コンプライアンスの体制整備は、制度的に義務化されていない。言わば、放送事業における固定費がない分、コンテンツの制作に資金投下ができるのである。ただ、この固定費が放送事業の信頼を高めて来たことも確かである。信頼はブランドであり、放送という商品の利益率を高めることにもつながる。

この1年はコロナ禍に翻弄されたことは間違いないが、その外にも多くの注目すべき節目を経験した。昨年8月には戦後75年目を迎え、また、この3月には、東日本大震災から10年を迎えた。それは時の流れのなかでの1つの通過点に過ぎないかも知れないが、特にマスメディア事業者にとっては、この通過点とどう向き合うかは、自身の立ち位置をどう考えているのかを示すことにつながるのも確かだろう。

東海テレビは、10年前に不適切テロップの送出という事件を起こした。この事件を教訓として、毎年、8月4日は「放送倫理を考える日」として、全社的な取り組みを実施してきた。昨年、今年は、新型コロナウイルス感染症の拡大防止の観点から、全社集会は取りやめられたが、あの事件から10年目ということもあり、あの失敗を忘れないために、放送倫理のありようについて、組織的な見直しを図られつつあると聞く。

東海テレビは、10年前の経験があるからこそ、放送サービスにおける視聴者からの信頼が、その事業の価値に大きく寄与するものであること、そして、その信頼の維持、また、回復には、不断の努力が不可欠であることを知っている。他方において、近年、伸長する動画配信サービスでは、通信領域でのビジネスであるがゆえに、その対応は個々の事業者の自由裁量に任されている。放送事業者が、放送倫理の維持、向上に力を注がなければならないことは、負担とも取れようが、他方で、それは組織的・戦略的な強みにもなる。もちろんそのためには、放送サービスに携わる全てのステークホルダーが共生でき、そして、放送倫理を維持・展開できる環境の構築こそが有用なのだ。新型コロナウイルス感染症の脅威に晒されたからこそ、その共生の環境の持つ価値がより顕在化したのではなからうか。



音 好宏（おと よしひろ）氏

上智大学文学部新聞学科教授

北海道札幌市生まれ。1990年上智大学大学院博士後期課程満期退学。日本民間放送連盟研究所勤務後、1994年より上智大学専任講師、その後、助教授を経て、2007年より現職。専門はメディア論。2013年より上智大学メディア・ジャーナリズム研究所所長を務める。

## 2020年

- 7月 放送倫理を考える月間
- 7月 2日(木) 第57回ギャラクシー賞  
【CM部門】優秀賞  
公共キャンペーン・スポット  
「見えない障害と生きる。」  
【テレビCM】選奨  
鳥羽水族館「プロフェッショナルがいる」  
【報道活動部門】選奨  
「検証ふるさと納税～手数料10%の衝撃～」
- 7月 3日(金) 2020年日本民間放送連盟賞  
テレビ部門中部北陸地区  
【エンターテインメント部門】1位  
「権藤 ゴンドウ 雨、ゴンドウ  
～壊れた肩が築いた“教えない教え”～」
- 8月 4日(火) 放送倫理を考える日  
「東海テレビこの1年の取り組み  
2020」発行・HPに公表
- 8月28日(金) 第28回コンプライアンス責任者会議
- 9月 9日(水) 第18回コンプライアンス委員会
- 9月14日(月) オンブズ東海第35回委員会
- 9月17日(木) 2020年日本民間放送連盟賞  
【テレビCM】最優秀  
公共キャンペーン・スポット  
「この距離を忘れない。」  
【テレビCM】優秀  
波瀬割箸生産組合「割り切れない日々に」  
【テレビエンターテインメント番組】優秀  
「権藤 ゴンドウ 雨、ゴンドウ  
～壊れた肩が築いた“教えない教え”～」
- 10月 6日(火) SDGs推進チーム発足(21年6月まで)
- 10月29日(木) 2020 60th ACC  
TOKYO CREATIVITY AWARDS  
シルバー 「この距離を忘れない。」
- 10月30日(金) 部長級ハラスメント研修
- 11月27日(金) 第29回コンプライアンス責任者会議
- 12月12日(土) 南海トラフ大地震を想定した  
名古屋モデル訓練
- 12月14日(月) オンブズ東海第36回委員会
- 12月23日(水) 第73回広告電通賞SDGs特別賞  
公共キャンペーン  
「見えない障害と生きる。」

## 2021年

- 1月27日(水) 国連SDGメディア・コンパクト加盟
- 2月26日(金) 第30回コンプライアンス責任者会議
- 3月 8日(月) オンブズ東海第37回委員会
- 3月16日(火) 第19回コンプライアンス委員会
- 4月 1日(木) 東海テレビプロダクション  
新入社員 コンプライアンス研修  
新入社員 コンプライアンス研修  
新入社員 番組考査関連研修
- 4月 2日(金)
- 4月 5日(月)
- 6月 1日(火) 第31回コンプライアンス責任者会議
- 6月 2日(水) 第58回ギャラクシー賞  
【CM部門】優秀賞  
公共キャンペーン・スポット  
「この距離を忘れない。」  
【テレビ部門】選奨  
オトナの土ドラ「その女、ジルバ」  
【報道活動部門】選奨  
「15秒のジャーナリズム報道ドキュメン  
タリーCM10年のあゆみ」  
【CM部門】奨励賞  
Askal カバン工房「笑顔の理由は？」
- 6月 7日(月) 第47回放送文化基金賞  
【番組部門 テレビドラマ番組】奨励賞  
オトナの土ドラ「その女、ジルバ」
- 6月14日(月) オンブズ東海第38回委員会
- 7月 5日(月) 2021年日本民間放送連盟賞  
テレビ部門中部北陸地区審査  
【教養部門】1位  
「チョコレートな人々」  
ATP賞  
【ドラマ部門】優秀賞  
オトナの土ドラ「その女、ジルバ」

## おわりに

今年も本報告書をご覧いただきありがとうございました。

今回の報告書の表紙には、手にした風船を遠くへ飛ばすイッチーを描きました。手にした風船は17色。SDGsの17の目標をモチーフに、番組やイベントなど、東海テレビのさまざまな活動を、皆さまのもとにお届けしたい…そんな想いを込めました。

新型コロナ禍の暮らしが続いています。とても長いトンネルですが、いつか必ず出口は見えるはずです。

私たちはこれからも放送や配信、そしてイベントなどを通じ、皆さまの暮らしをより豊かにできるよう努めてまいります。

引き続き、よろしくお願いいたします。



東海テレビこの1年の取り組み2021

<制作・編集>

東海テレビ放送コンプライアンス推進局  
コンプライアンス推進部

〒461-8501

愛知県名古屋市東区東桜一丁目14番27号

Tel. 052-951-2511 (代表)

<https://www.tokai-tv.com>

<表紙・裏表紙デザイン>

制作局美術部 山崎 孝治

発行年月 2021年8月

※ 文中の所属・肩書については原稿作成時点のものとなっています。



**東海テレビ放送株式会社**